

三国（印度・中国・日本）に亘る浄土真宗の展開

紅 棧 英 顕

はじめに

浄土真宗の宗祖親鸞聖人（一一七三—一二六三）は主著『顕浄土真
実教行証文類』（『教行信証』）の「総序」に

噫、弘誓の強縁多生にももう値ひ巨く、真実の淨信億劫にも獲巨
し。遇たま行信を獲ば遠く宿縁を慶べ。（中略）爰に愚禿積の親
鸞慶はしい哉。西蕃月氏の聖典、東夏日域の師釈に、遇ひ難くし
て今遇ことを得たり、聞き難くして已に聞くことを得たり。真宗
の教行証を敬信して特に如来の恩徳深きことを知んぬ。（真聖全

二の一）

と述べている。即ち自身が阿弥陀仏の本願の教え（浄土真宗の教え）
により救いを得たことの慶びを述べ、このことは、ひとえに如来（阿
弥陀仏）の力により、遇うことの難しい西蕃月氏（印度地方）の聖典
（經典や高僧の論釈）や東夏（中国）日域（日本）の師釈（高僧の論
釈）に遇うことができ、教えを聞くことができたからである。真宗の
教行証（浄土真宗の教え）を信じ救いを慶ぶ身となって、強く如来
（阿弥陀仏）の恩徳の深いことを知ることができた、と自らの感激を

述べているのである。

現在、宗派としての浄土真宗の宗祖は親鸞（親鸞聖人の略。以下
同）であり、また浄土真宗の教えは親鸞の教えといっても差し支えは
ないのであるが、親鸞にとつて浄土真宗とは、印度に生まれた釈尊か
ら始まり、印度、中国、日本と伝えられてきた浄土の真実の教えとい
う意味なのである¹⁾。

親鸞がそれによつて救いを得たものであり、そしてそれがさらに親
鸞により展開され形成されたものである。

また親鸞は『末灯鈔』一に

浄土宗のなかに真あり仮あり。真といふは選択本願なり、仮とい
ふは定散二善なり。選択本願は浄土真宗なり。定散二善は方便仮
門なり。浄土真宗は大乘の中の至極なり。（真聖全一の六五七）

と述べている。ここに「選択本願は浄土真宗なり」と述べているよう
に、選択本願即ち第十八願の教法が浄土真宗というのであり、そして
またこれが「大乘の中の至極なり」と宣言するのである。即ち親鸞は
自分自身が救いを得た浄土真宗こそが大乘仏教の中で最も優れた教
法、即ち仏教の中で最も優れた教法であるとするのである。これは決

して勝手な独断であると非難すべきことではない。およそ宗教の教祖、開祖にとって自己の説く教えこそが、自己が悟りもしくは救済を得た教えであり、自己にとって最高の唯一無二の教えであるからである。

本稿では親鸞がいう西蕃月氏の聖典、東夏日域の師釈を窺い、三国（印度、中国、日本）に亘る展開がどのようなものであったのか。またそのかなめとなったものが何であったかに視点をおいて考究するとにする。

一 釈尊の出世本懐と七祖の選定

親鸞は『顕浄土真実教行証文類』「教巻」に

夫れ真実の教を顕さば則ち『大无量寿経』是也。斯の経の大意は（中略）如来の本願を説いて経の宗旨と為す、即ち仏の名号を以て経の体と為る也（真聖全二の二）

と述べて、真実の教は『大无量寿経』（『无量寿経』）の所説であり、如来の本願（阿弥陀如来の第十八願）の教法であると述べている。そして「教巻」の終わりに

誠に是れ如来興世之正説、奇特最勝之妙典、（真聖全二の四）

と述べて、如来の本願が説かれている『大无量寿経』が真実の教であり、出世本懐の教であるとし、『顕浄土真実教行証文類』の「行巻」の終わりにあり、古来「粗一宗大綱の要義を述ぶ」といわれる²。『正信偈』には

如来世に興出したまふ所以は 唯彌陀の本願海を説かむとなり。

（真聖全二の四三）
と述べている。

このように親鸞は八万四千の法門といわれる釈迦一代の諸教の中で彌陀の本願（第十八願）の説かれた『大无量寿経』が真実の教であり、釈尊の出世本懐の経であるするのである。

そして『正信偈』依釈段に

印度西天之論家 中夏日域之高僧大聖興世の正意を顕し 如来の本誓機に應ぜることを明かす（真聖全二の四四）

と述べて、印度西天（印度地方）の論家、中夏日域（中国、日本）の高僧が大聖（釈尊）がこの世に出てきた正しい目的を明らかにし、如来（彌陀）の本願が機に應ずること、即ち罪の深い者を救うためにあることを明らかにした、と述べている。そして親鸞は「大聖興世の正意を顕し、如来の本誓が機に應ずることを明かした」人達として龍樹、天親（世親）（印度）、曇鸞、道綽、善導（中国）、源信、源空（法然）（日本）の七人（七高僧）を選定したのである。

七祖選定の理由として従来種々論じられているが、近年出版された本願寺派勸学寮編にそれをまとめて

一、製作の有無³著述があるかないかということ

二、所説の了否⁴説いていることが本願の趣旨にかなっているかどうかということ

三、開顕の釈功⁵先人の解釈の踏襲ではなく、その人独自の見解とある。上述のように親鸞自身が『正信偈』に「大聖興世の正意を顕し、如来の本誓機に應ずることを明す」と述べているのであるから、

（これを發揮という）が、示されているかどうかということ³。

この中でも二の「説いていることが本願（第十八願）の趣旨にかなっているかどうかということ」に損まると考えられる。

二 龍樹、天親（世親）（印度）の釈義

龍樹（ナーガールジュナ）（二世紀後半）は大乗仏教の祖といわれ、また八宗の祖師ともいわれており、著書は多いが浄土真宗に関わりの深いのは『十住毘婆沙論』と『十二礼』である。親鸞は『正信偈』の龍樹の下に

難行の陸路苦しきことを顕示して 易行の水道楽しきことを信樂せしむ 彌陀仏の本願を憶念すれば 自然に即の時に必定にいる 唯能く常に如来の号を称して 大悲弘誓の恩を報ずべしといへり（真聖全二の四四）

と述べている。難行の陸路（自力の道）は苦しいから易行の水道（他力の道）によるべきことを示し、彌陀の本願を信じたときに不退の位にいるのである。仏の名を称え（念仏して）彌陀の御恩に感謝しなさいといわれていると讃じている。龍樹の浄土真宗についての釈功は『顕浄土真実教行証文類』に詳細に述べられているのであるが、それはここに述べられている難行道（自力）と易行道（他力）を示して易行道（他力）によるべきこと、本願を信ずることにより、往生が決定し、現生に必定の位（現生不退位、現生正定聚の位）に入るといふこと、そして必定の位（現生正定聚の位）を得たあとで称える念仏は報恩の念仏（称名報恩）であるということの三つであるといえよう。難行道（自力）と易行道（他力）の自力・他力の問題は七祖において共

通であるが、現生不退（現生正定聚）は親鸞に大きな影響を与えたものである。『大无量寿経』所説の十一願文は

設ひ我仏を得んに、国の中の人天、定聚に住し、必ず滅度に至らずば、正覚を取らじ。（真聖全一の九）

とあるように、願文の当面では現世における正定聚（現生正定聚）ではなく、死後浄土で得る不退（彼土不退、彼土正定聚）なのである。龍樹の『十住毘婆沙論』は聖道經典である『華嚴経』の十地品を解釈したものである。従ってそこに現生不退が述べられているのであるが、親鸞はそれによって浄土教における現生不退（現生正定聚）を述べたのである。そして本願を信じて現生不退（現生正定聚）の身になり、その上での称名報恩を述べているのである。

天親（世親、ヴァスバンドウ）（四〇〇年頃）は瑜伽行唯識派の完成者として有名であり「千部の論主」といわれ多くの著述があるが浄土真宗に関わるものは『浄土論』（無量寿経優婆塞提舎願生偈）である。『正信偈』の天親の下には

広く本願力の回向に由りて 群生を度せんが為に一心を彰はす 功德大宝海に帰入すれば 必ず大会衆の教に入ることを獲 蓮華藏世界に至ることを得れば 即ち真如法性の身を証せしむと 煩惱の林に遊んで神通を現じ 生死の蘭に入りて応化を示すといへり（真聖全二の四五）

と述べて、天親が本願の三心（至心、信樂、欲生）を衆生に解り安くするために一心で彰し、一心（信心）一つで浄土往生できることを示し、それをすすめた。浄土に生まれたら仏となり、迷いの世界に入りて他者を救うといわれていると讃じている。親鸞の信心の考えおよび

往生思想に与えた影響は大きなものである。

二 曇鸞、道綽、善導（中国）の釈義

曇鸞（四七六―五四二）は著述に『浄土論』（無量寿経優婆提舍願生偈）の注釈書である『往生論註』（無量寿経優婆提舍願生偈註）二卷、『讚阿弥陀仏偈』、それと真撰であるか否か不明の『略論安楽浄土義』とがある。『正信偈』の曇鸞の下に

天親菩薩の論を註解して 報土の因果を誓願に顕す 往還の回向は他力由る 正定之因は唯信心なり 惑染の凡夫信心発すれば 生死即涅槃なりと証知せしむ 必ず無量光明土に至れば 諸有の衆生を皆普く化すといへり（真聖全二の四五）

と述べている。天親の『浄土論』を註解して、浄土は阿弥陀仏の本願によって出来上がったものであることを示した。往還の二回向を述べ、これがすべて他力によることとし、自分が浄土に生まれて悟りを開いたら（往相回向）、他者を救うためにこの世にこの世にかえる（還相回向）といわれていると讃じている。曇鸞の往還二回向論は親鸞の他力回向義の積頭に大きな影響を与えている。

道綽（五六二―六四五）は四十八才の時曇鸞の事績を記した碑文に触れて浄土教に帰した。著述は『安楽集』二卷である。『正信偈』には

道綽聖道の証し難きことを決し 唯浄土の通入すべきことを明かす 万善の自力勤修を貶す 円満の徳号専称を勧む 三不三信の誨愍愍にして 像末法滅同じく悲引す 一生悪を造れども弘誓に

値ひぬれば 安養界に至りて妙果を証せしむといへり（真聖全二の四五）

とある。聖道門によるべきでなく、浄土門によるべきであること、自力の行によらず、他力の念仏によるべきであることを述べ、自力の信心でなく、他力の信心でなければならぬことを示す。そしてこの他力念仏の教えは像法、末法、たとえ法滅のときでも人々を救うことのできる教えであることを述べ、一生悪を造つたものも本願の救いに値えば救われるといわれていると讃じている。末法の世においては聖道門によらず浄土門によるべきことを強調したのが大きな勲功である。

善導（六一三―六八一）は著述に『観経四帖疏』（玄義分）、「序分義」、「定善義」、「散善義」四卷、『法事讃』二卷、『観念法門』、『往生礼讃』、『般舟讃』がある。『正信偈』には

善導独り仏の正意を明かせり 定散と逆悪とを矜哀して 光明名号の因縁を顕す 本願の大智海に開入すれば 行者正しく金剛心を受けしめ 慶喜の一念相應して後 韋提と等しく三忍を得 即ち法性之常楽を証せしむといへり（真聖全二の四四）

とある。即ち善導が当時の聖道門（自力仏教）の諸師が『観経』の解釈を間違えていた中で善導が独り仏の正意を明らかにし、凡夫往生の他力念仏の教えを明らかにした。いわゆる古今楷定（古今の誤りをただし、真意をあきらかにする）をしたと述べている。本願を信ずる身になったならば、我々は凡夫である韋提希のように救われて浄土に生まれて悟りを開くといわれていると讃じている。『観経』が凡夫往生を説く経であることを明らかにし、第十八願の「乃至十念」を「下至十声」と釈して念仏往生をすすめたのが善導の大きな勲功である。後

の日本の源空（法然）は「偏に善導一師に依る」（『選択集』、真聖全一の九九〇）と述べて敬っている。

四 源信、源空（法然）（日本）の釈義

源信（九四二—一〇一七）は著述と目されているものは多くあるが浄土真宗と関わりのあるのは『往生要集』三巻である。『正信偈』には

源信広く一代経を開いて 偏に安養に帰して一切を勤む 専雜の
執心浅深を判じて 報化二土正しく弁立せり 極重の悪人は唯仏
を称すべし 我また彼の撰取の中に在れども 煩惱眼を郭げ見ず

と雖も 大悲憊きことなく常に我を照らしたまふといへり（真聖全二の四五）

と述べている。即ち源信は釈迦一代の教えを開き、その中で阿弥陀仏の浄土の教えに帰して、一切の人々にすすめた。自力の信は浅く他力の信は深いことを示し、自力の者は化土に生まれ、他力の者は報土に生まれると述べた。罪の深い悪人は念仏しなさい。私も救いの中にあります。煩惱に眼をさまたげられて見ることは出来ないが仏の光は常に私を照らしているといわれていると讃じている。浄土に報土と化土の二土とがあることを述べたのは源信の大きな釈題であった。

源空（法然）（一一三三—一二二二）は著述は『選択本願念仏集』である。上述のように親鸞は浄土真宗の継承者として七高僧を選定するのであるが、直接会う機会があったのは源空のみであり、源空は面授親承の師である。しかも源空の導きにより、自力の道棄て、他力

の道である浄土真宗に帰入したのであるから、一番大きな影響を受けた人といえるのである。『高僧和讃』に

眩劫多生のあひだにも 出離の強縁しらざりき 本師源空いまさ
ずば このたびむなくすぎなまし（真聖全二の五一三）

と述べていることからまさにこのことがいえるであろう。『正信偈』には

本師源空は仏教に明らかにして 善惡の凡夫人を憐愍せしむ 真
宗の教証を辺州に興す 選択本願を惡世に弘む 生死輪轉の家に
還來することは 決するに疑情を以て所止となす 速やかに寂靜
无為の樂に入ることば 必ず信心を以て能入すといへり（真聖全二の四六）

と述べている。尊い師である源空は凡夫を憐れみ、釈尊の出世本懷の教えである浄土真宗を日本に興し、第十八願の他力の教えを惡世に弘めた。迷いの家にかえるのは疑いのころがあるからであり、さとりの世界に入るのはだだ信心によるといわれていると讃じている。

法然の主張の要は『選択本願念仏集』の三選の文に

夫れ速に生死を離れんと欲はば、二種の勝法の中に、且く聖道門を闡きて浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲はば正・雜二行の中に、猶助業を傍にして選びて正定を専らにすべし。正定之業とは即ち是仏の名を称するなり、称名は必ず生を得、仏の本願に依るが故に。（真聖全一の九九〇）

とあるように、聖道門・諸行を廃捨し、一切の自力的要素を否定して「仏の本願に依るが故に」を根拠とし、本願（第十八願）の文の「乃至十念」を「下至十声」と釈した善導の意を継承して、さらにそれを

徹底し念仏のみが本願の行であり、勝易二徳を具えたものであり、他の行とは比較にならない勝れた行であるとした念仏一行専修の主張をしたのである。これは正行の中の助業の兼修も否定するものであり⁵⁾、念仏思想において大きな展開がなされたものであった。

五 親鸞の發揮

『正信偈』の結びに親鸞は

弘經大土宗師等 无边の極濁悪を拯濟したまふ 道俗時衆共に同心に 唯斯の高僧の説を信ずべしと（真聖全二の四六）

と述べている。ここの「弘經大土宗師」とは上に述べた三国（印度、中国、日本）に亘る浄土教の祖師、七高僧を指す。また親鸞の曾孫覚如（一二七〇—一三五二）が著した『御伝鈔下』には

しかるにいま唯有浄土の真説について、忝なくかの三国の祖師、おのおのこの一宗を興行す。この所以に愚禿⁶⁾、勸むるところ更に私なし。（真聖全三の六五一）

と述べられているように、親鸞自身は自分の述べる所はすべて三国の七高僧の語られたところであり、自分の考えは全くないと述べているのである。しかし実際は独自の發揮が極めて顕著なのである。親鸞の自分は三国祖師（七高僧）の意を継承しただけであり、自分の考えは少しも述べていないという姿勢は無論親鸞の謙虚な人格のなされたところではあるが、自分の述べる他力の浄土真宗は仏意に適い、三国祖師の意にも適うものであり、断じて独断ではない真実のものであるということを表すためでもあったと思われる。

私は親鸞の教えの大きな特徴として、一、他力の救い、二、現世からの救い、三、悪人の救い、の三つを挙げることができると思う。

一の他力の救いについては、七祖全員の説くところであり、全員が彌陀の本願に信願すべきことを勧めるのではあるが、完全に聖道門諸行を廃して本願に依る念仏一行専修の主張をしたのは法然であった。

この念仏一行のみで他の行は一切廃捨すべきとする主張は『浄土三部經』の当面の意や七祖の釈の当面にもないことであった。貞慶（一一五五—一二二二）の『興福寺奏状』、高弁（一一七三—一二三二）の『摧邪輪』、『摧邪輪莊嚴記』等の激しい反論、非難があったのも当然ともいえるのである。その非難に対応し更に他力的に展開したのが親鸞独自の釈である『浄土三部經』の中の『觀經』と『阿彌陀經』に隠頭があるとする三經隱頭釈であり、四十八願の中に真実の願と方便（仮）の願があるとする願海真偽論である⁷⁾。報化二土についても真実願（十八願）酬報の土が真実報土であり、方便願（十九願、二十願）酬報の土が方便化土としたのである。また天親（本願力回向）、曇鸞（往還二回向）の示した回向論についても、天親、曇鸞においては行者（願生者）の回向であるが、親鸞はこれを彌陀の回向とし、独自の他力回向義を釈した。そして信心も念仏とともに彌陀より回向されたものとしたのである。

二の現世からの救いの強調については、現生正定聚（現生不退）を主張した。これは『浄土三部經』の当面および龍樹を除いた七高僧の釈にもみられないものである。尤も龍樹が現生不退を述べた『十住毘婆沙論』は、上述のように聖道經典である『華嚴經』の十地品を解釈したものである。従って浄土教における現生正定聚はまさに親鸞の發

揮といえる⁹⁰。それからこれにとまなうものであるが、それまで浄土教で極めて重視されていた臨終来迎の否定がなされるのである。これは全く他者にはないものである⁹¹。

三の悪人の救いについては善導の『観經四帖疏』『玄義分』に「定んで凡夫の爲にして聖人の爲にせざることを来し証す」（真聖全一の四四八）とあり、元暉（六一七—六八六）の『遊心安樂道』には「浄土宗の意、本凡夫の爲にして、兼ねて聖人の爲なりと」⁹²とあるように浄土教においては古くからいわれていたということもできるであろう。しかし善人よりも悪人こそが彌陀の救いの目当てであるとする悪人正機説⁹³を主張し、しかも「彌陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり」（『歎異抄』後序、真聖全二の七九二）と述べているように、自分こそが最も罪の深い悪人としたのは法然にもなかつた親鸞独自のものといえよう⁹⁴。

むすび

以上三国に亘る浄土真宗の展開を述べた。

上に述べたように親鸞のいう浄土真宗とは『末灯鈔』一に

選択本願は浄土真宗なり。（真聖全二の六五八）

とあるように阿弥陀仏の第十八願に他ならないのである。そして第十八願の他力の教法こそが釈尊の出世本懐の教法であるとする。また親鸞の教判の二双四重判においては横超、真仮偽判においては真とし、いずれにおいても第十八願の他力の教法（浄土真宗）こそが最高の真実の教法であるとするのである⁹⁵。

上述のように親鸞が浄土真宗と述べる第十八願の教法は釈尊の説いた經典（『大无量寿經』）に源を発し、主として三国（印度、中国、日本）に亘る七高僧に継承展開されたものである。既に述べたように親鸞自身は『正信偈』の結びに

弘經大士宗師等 无边の極濁悪を拯済したまふ 道俗時衆共に同心に 唯斯の高僧の説を信ずべしと（真聖全二の四六）

と述べ、また『高僧和讃』には

智慧光のちからより 本師源空あらはれて 浄土真宗をひらきつ
つ 選択本願のべたまふ（真聖全二の五一三）

と述べているように親鸞自身は三国に亘る七高僧に継承展開された浄土真宗に遇わして頂いただけであるという姿勢を取り、さらに『正像末和讃』には

三朝浄土の大師等 哀愍撰受したまひて 眞実信心すすめしめ
定聚のくらゐにいれしめよ（真聖全二の五二）

とも述べているように「三朝浄土の大師等」（三国に亘る七高僧）が我々をあわれみ眞実信心をすすめ定聚のくらゐにいれしむるのである、と述べている。あくまでも自分はただ七高僧の教えを継承するのみとするのであるが、とくにこの和讃における「眞実信心すすめしめ 定聚のくらゐにいれしめよ」とある言葉に、現世からの救いを強調し、經典や七高僧の当面の意をかえて、現生正定聚、臨終来迎否定を主張した親鸞の發揮と救済体験による信念とをみる事ができると思ふのである。

このように、上述の曾孫覚如が著した『御伝鈔下』に「愚禿勸むるところ更に私なし。（真聖全二の六五一）とあるように、自分は七高

僧の教えにただ信順するのみと述べるように、親鸞自身の思いはそうであったとも考えられるが、事実のところは親鸞自身の救済体験から生じた信念と確信による多くの發揮がなされ、大きな展開がなされたといえるであろう。

- 註(1) 「真宗」を浄土の真実の教えという意味とする用法は善導の『観経四帖疏』『散善義』に「真宗遇ひ叵し」（真聖全一の五五九、「行巻」引用、真聖全二の三四）、法照の『浄土五会念仏略法事儀讃』に「念仏成仏は是れ真宗」、「念仏三昧是れ真宗」（「行巻」引用、真聖全二の二四）とあり、親鸞以後の一遍（一二三九―一二八九）の『一遍上人全集』（春秋社）に「浄土の教門を學し、真宗の奥義をうけ給し程に」（五頁）とあり、著者不詳（恐らく真宗外）の『安心決定鈔』に「浄土真宗の行者は」（真聖全三の六一五）等とある。尚、鳳嶺（一七四八―一八一六）の『安心決定鈔記卷二』には「浄土真宗以下の文は第十八願を挙ぐるに付いての前置きなり。（中略）近頃こそ浄土真宗の別名のようになりたれども。古代の書物を見るに鎮西（鎮西、西山）の二家がみな浄土真宗といふ也」（真宗大系三一の一三一）とある。
- (2) 親鸞の玄孫存覚（二二九〇―一三三七）の『六要鈔』、（真聖全二の二六五）。
- (3) 『浄土三部経と七祖の教え』（本願寺出版社、二〇〇八、七）九二頁。
- (4) 七祖の中で龍樹以外の他の六祖は彼土不退（彼土正定聚）を述べている。
- (5) 念仏一行の専修の主張は七高僧の他師にもないものである。善導において正行の中に正定業（念仏）と助業（説誦、觀察、礼拝、讚歎）の分別はするが助業を廢捨するのではない。
- (6) 親鸞のこと。
- (7) 拙著『浄土真宗がわかる本』（教育新潮社、一九九四年十二月）第二章第一節第二項、第三項、四五頁以下。

- (8) 幸西（一六三―一四七）の『玄義分抄』『別時門』に「然れば則現身得不退の益……入正定聚というは一念を指すなり」とあるところは、親鸞の現生正定聚論に先行するものであるかのようにみえるが、「証彼無為之法樂は初地、既生彼国更無所畏長時起行は万行円備、果極菩提は仏果也」とあるように、往生して初地を得、それから、万行を修して仏果を得るのであり、親鸞の現生正定聚とは内容の異なるものである。
- (9) 拙稿「親鸞浄土教における救済の現実的意義」（印仏研究第五の一、二〇〇二年十二月）。
- (10) 浄土宗全書六の六二五、『選択集』二門章引用（真聖全一の九三〇）。『遊心安樂道の「浄土宗の意、本凡夫の爲にして、兼ねて聖人の爲なり」との文は善導より前と思われる迦才の『浄土論』（浄全六の六四三）にある。尚、近年『遊心安樂道』の著者は元曉ではなく、少し後代の人と考えられている。
- (11) 拙著「浄土真宗がわかる本」（教育新潮社、一九九四年十二月）第二章第二節第二項悪人の救い、六三頁以下。
- (12) 近年悪人正機説というべきではなく、悪人正因説というべきだという意見がある。これは悪人正機説というのでは『歎異抄』第三の自力修善の善人を否定し「他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり」（真聖全二の七七五）と述べて「他力をたのみたてまつる悪人」にプラス価値を語る親鸞思想の画期性を否定するものだという。親鸞が自力要門真門を厳しく否定し「罪福ふかく信じつつ善本修習するひとは疑心の善人なるゆへに方便化土にとまるなり」（真聖全二の五二四）等と述べ善本修習のひとを「疑心の善人」と眺めているところはあがるが、親鸞は自己をあくまでも極悪人とみただけであり、自己を悪人ということにプラス価値を語っているとは思えないので、ここではこの問題は取り上げない。
- (13) 同右、第二章第一節第五項教判論、五四頁以下。